

ヨーロッパ旅日記

星 埜 和

8月5日 午後6時SAS機で羽田を出発。旅費だ旅券だ査証だと出発前のあわただしさから解放されてはつと一息。前途2月半の長旅がいくらか気にもかかるが京大村山教授が同行してくれるので心強い。機中MSA出席の日本人で満員に近い。沖繩、バンコック、ラングーン、カラチ、カイロ、ローマ、ジュネーブ、フランクフルト、コペンハーゲンと一気に飛び、ストックホルムへ7日夜半に着く。途中カラチ飛行場の浸水事故で到着が数時間遅れたほかは極めて平穏な空の初旅だった。

スウェーデン王立土質工学研究所の案内で港運河道路橋梁地下鉄の工事現場を見たほか、10,11の両日土質の調査機械試験機械の現場展示会に出席。土質研究の草分けとして歴史を誇る国だけあつて現地の地層調査に用いるサウンディング、ボーリングの機械は何れも斬新な設計で材質工作ともに極めてよい。基礎研究の面もなかなかつかりしている。スウェーデンの生活水準は世界一高いとし聞いていたが予想以上、若い独身の研究員が自家用を乗りまわし便利なアパートに住んでいる。ストックホルムはきれいな水に囲まれた美しい都市ですみずみまで清潔、第一印象はすばらしいの一語につきる。

8月12日コペンハーゲンに飛ぶ。デンマーク工科大学研究室を訪ね、道路の現状を見る。この附近の地盤はかつて氷河時代に数百ないし数千トンの氷圧をうけ極めて堅固な由。一日ノースゼーランド地方に観光バスを駆る。歴史もあり風景も勝れている。

8月14日スイスエヤでチュリッヒに飛ぶ。コンGRESハウスで国際会議の受付をすませてからホテルへ向う。

15,16の両日本会議に先立つて国際学会の常任委員会あり。村山教授と出席。定款改正をめぐり用語、財源、部門分類、印刷物などで議論百出したが、議長テルツァギ教授の司会は鮮かにこれをさばいて滞りない。新たに設けられた五人の副会長一人に自分が当選しようなどとは夢にも想像できなかった出来事。新参日本の実力が認められたとは思えないまでも好意のほどはまことにうれしかった。

17日より21日までいよいよ土質力学基礎工学第3回国際会議(The Third International Conference on Soil Mechanics and Foundation Engineering)の本会議開幕。提出論文はすでに2巻の論文集に収められて世界の会員に配布されているので、本会議では部会ごとに一般報告と討論が行われるだけである。基本理論の第一部会

から法面安定、土ダム、地下水などの第8部会まで1部会半日のわりで順を追って進められ、途中に半日のエキスカージョン、研究所見学、夜会があり、夜まで日程に組まれている。討議は1人5分程度、多くは幻灯の助けをかり要点を簡潔に述べ極めて能率がよい。スイス側の行き届いた準備と心からの歓迎は800名の参加者に十分な満足を与え最大の成果を収めた。

8月22日朝チュリッヒを出発4日間の見学旅行を終えて25日タローザンヌに着く。初日はチュールを経てマルモレーラの土ダム工事見学、サンモリッツ泊り、2日目は国境をこえてイタリアのコモ湖畔をドライブ、ルガノ泊り。3日目はサンゴタルトンネルを抜けサステンバスを越えて地下発電所を見てインターラーケン泊り。最終日はレッチェベルグトンネルの前後で地切り地や雪崩止め落石止めの工事を見、レマン湖東岸のシュオン城を見物、遊覧船でローザンヌへ。

26日ローザンヌ大学講堂で閉会式、パレスホテルでなごりの晩餐会、さらにしめくくりの常任委員会があり同夜はガーデンパーティと観劇会が催された。

8月27日イタリア国境に近いモーボアザンのアーチダム基礎工事を見学して全日程を終る。多くの世界的な学者知名人と知り合う機会を得、次のロンドン会議に再会を約して名残りを惜む。スイスは国中どこへ行つても勝れた風景と美しい人情の豊かな土地ばかり、ナポリあたりのすれつからしの観光地とは雲泥の違いで、誰しも再び訪れる日の近いことを望んだに違いない。

8月28日村山、福岡両氏と早朝ローザンヌ駅発、国境を越えて西ドイツに入り夕刻ミュンヘンに到着。土日の両日折から開催中の交通博覧会、博物館、市中を見て廻る。いわば京都のような歴史のある落付いた都市。爆撃のあとがまだそのまま残っている。訪問した西ドイツの諸都市はいずれも例外なくやられている。そそり立つ廢墟のような建物や煉瓦屑の山を見るとドイツの復興はまだまだという感じをうけるが、外観よりも内容に重点をおいた復興計画のおかげで見かけよりずつと復興しているとの事、通貨も安定していてインフレの影も見られない。イタリアはともかくとしてフランスやベルギーがストやインフレに悩んでいるのとむしろ奇妙な対照をなしている。その上ドイツ人の気分の明るさ若さに驚ろかされる。禍を転じて福となすというか工作機械など新品ぞろいで他国をどんどん凌駕し意気当るべからずとは在外

の日本人技術者から聞いた話。

8月31日ツアイスの写真測量商会、再建中の工科大学実験室を訪ねた後、ミュンヘンを去りカールスルーエに向う。

9月1日国立水工基礎工研究所訪問、2日ダルムシュタットへ、工科大学の研究室を見学、市中も大学も手ひどい被害をうけているが研究意欲は盛んで新しい設備が整えられつつある。3日フランクフルトへ、メイン河の橋を見て一泊、4日オイロバパスで自動車国道を飛ばし、カッセル、ゲッティンゲンを経て夕方ハノーバーへ着く。自動車国道はバスの最高時速が80キロで平均時速がやはり80キロとはドイツ技術者の自慢話。つまり速度を低下させるような障害物は何一つないというわけ。なるほど乗心地は快よく維持も行き届いている。大型重車輻も見られ交通量はかなり多い。安全感は十分である。欧州各国とも最近では速度制限を撤廃して運転者の判断に任せている。地方道を含めて道路施設が著しく改善された結果である。舗装のない道路などまず見る事ができない。

9月5日ハノーバー大学フランテウス研究所を見る。土質と水工の研究が行われ、海外からの委託もある。6日ヘルムンの建設機械製作所を見る。振動を与える小型のローラーやコンクリート舗装機械などアメリカ式と異つて日本の技術者に参考となる点が少なくない。7日ハノーバー飛行場の舗装工事を見てハンブルグへ、国立道路技術研究所を訪ねる。アルトナ駅に近い仮庁舎に在るが近くケルンに移り本格的な研究を始めるとのこと。前途に大きな希望をもっている。8日は所長の案内でハンブルグ北方150キロばかりロックの建設工事を見る。特殊な杭や矢板の工事、プレストレスが応用されている。同夜ハノーバーに引返し、9、10、11の3日間をベルリンで過ごす。往復ともBEAを利用。政治向きの話となるべく触れないつもりだったが、ベルリンの話題は何といつても対ソ関係、終戦直後に見たソ連兵、食糧、抑留者、ラジオの宣伝戦などなど。ベルリン大学とDEGEBOを訪ねる。基礎支持力の大型実験や振動実験など落付かないと思われる環境の中で熱心にすすめられている。わざわざ飛んできただけの収穫はあつたというもの。

11日午後ハノーバー発、ケルン乗換え、夜半アーヘンに着く。オランダとベルギーに近い国境の町、翌日工科大学土質工学研究所を訪ねる。ここも再建中で設備は凡て新しい。建設機械研究所もついでに見せてもらう。13日の日曜は観光バスでライン河に遊ぶ。

9月14日西ドイツを離れ、バスで国境をこえマーストリヒトに出、汽車で夜デルフトに着く。翌朝土質工学研究所を訪ねる。オランダは小国ながら海面より低い開拓地をもち三角洲の軟弱地盤が多いので土質の研究はヨーロッパでも進んでいる。第2回国際会議は1948年こ

で開かれた。セルテストの本場、ポーリング、サウンディング、定温室の三軸実験、粘土の熱分析など見るべきものが多い。19日まで滞在して水工研究所、北海運河のトンネル工事、この冬高潮で氾濫したゼーランド地区の締切工事、マーストンネル、道路建設工事などを見学。高潮対策として海岸線を一大長堤で締切る雄大な案が考えられている由。

20日ベルギーに入りブラッセル一泊。構造技術研究所の大型繰返し荷重試験機を見て、オステンドーバー経由、ロンドンへ。

9月21日より30日までロンドン滞在。英国土木学会、ロンドン大学研究室、道路技術研究所、建技術研究所、ケンブリッジ大学工学研究所などを訪問。三軸などの基本研究、土壌安定、乾燥による地盤沈下、斜面安定などの応用研究が参考になつた。道路の建設技術、交通の調査安全の研究も日本に近い事情もありまことに興味が深い。日曜にウインザー城、イートンカレッジ、ハンプトンコート宮に遊ぶ。ロンドンの国際会議に出席中の菊池教授にあい、ロンドン塔、テームス河を一緒に見た。

9月30日ゴールドンアロー号でパリへ。7日まで滞在。パリタス研究所、道路橋梁研究所、公共建設技術研究所を訪ねる。フランスの事情は全く不案内であつたが立派な設備をもち独特の考案が行われていることを知る。振りを加える三軸の研究など極めて珍らしく重要な結果が期待される。エッフェル塔に上る。日曜にロンドンからきた菊池教授とルーブル博物館とベルザイエ宮を見物する。

6日7日とナンシー附近の陸軍飛行場工事を見てパリへ引かえし、7日夜行で南下、翌朝ロンゴージュ着、ロアール河の上流からローヌ流域へ抜けヴァランス一泊。その間アーチダムとトンネルとモンピサ発電所工事を見る。アーチダムの大胆な薄さには目をみはる。

9日ヴァランスよりグルノーブルへ。13日まで滞在イタリー国境に近いアルプス山中のマルゴパール発電所テインのアーチダムを見る。山間僻地でも道路はすべて舗装されてよい。12日はネルピック水理研究所を見学世界各国から研究を委託されており、模型実験の大きかりなのに驚ろく。防波堤捨石の特許工法も面白い。

10月13日早朝グルノーブル発、スイスのジュネーブへ向う。同地一泊、翌日ニース経由ローマへ飛ぶ。

14日より18日までローマ滞在。ローマ市内、ナポリ、ポンペイの見物に日を送る。2000年の歴史的遺物である城壁の一角と最新式のローマ駅とは奇妙なコントラストをなしている。最も古くて最も新しい都市。遺跡を尋ねて廻れば1月でも足りないとのこと。よいかげんにあきらめて18日夜半帰国のSASに乗る。20日の夜半には羽田に着いていた。(1953・11・18)